

唐・神策軍と皇帝私庫

林美希

唐の北衙禁軍は安史の乱とともに再編され、それまでとは全く異なる組織へと変貌した。羽林軍・龍武軍からなる前期の北衙は、騎兵主体の近衛軍で基本的に出征は想定されておらず、最大でも三万名程度であった。これに対して神策軍を中心とする後期の北衙は、外寇・藩鎮討伐に出向く国家中央軍としても活動し、約十五万名を擁した。宦官を総帥とし、「北司」と称され行政機能をも備えたことも大きな特徴である。

前期北衙と後期北衙を軍事組織として比較してみると、その相違は①形態、②機能、③規模の三点に集約される。特に③については、単純計算で前期の五倍であり、唐後半期には兵制のシステムが募兵制へ切り替わったことと相俟って、北衙神策軍の経営は国家財政上の大きな問題となった。けれども、それでも朝廷には、神策軍を維持し続けなくてはならない理由があったのである。

それは神策軍に課せられた役割と深い関係がある。彼らに期待されたのは、①吐蕃に対する藩屏、②朝廷の爪牙として朝廷に従わない藩鎮を牽制する軍事力という役割であった。さらに神策軍が親軍化する過程には、優秀な節度使軍を解体吸収し、唐初以来の皇帝直属の近衛軍に国家の軍事力の「要」を直結させるという体制を再構築しようとする唐朝廷の努力が窺える。

では、神策軍を維持する費用はどうやって工面されたのだろうか。ここで、この時期の国庫の変遷が注目される。玄宗期より「皇帝私庫は毎年、国庫から一定額の支給を受ける」という原則が変化し始めた。ついで安史の乱のさなか、財貨の流出を防ぐために国庫収入はすべて皇帝私庫へと納められ、徳宗期に再び国庫と皇帝私庫が分離するまでは、財政は一本化された。このような変遷と神策軍の拡張状況とを重ねあわせてみると、肅宗期から徳宗期にかけての神策軍の段階的な拡張整備や禁軍化には、皇帝・宦官が財庫からほとんど自由に支出できるという状況が深く関わっていたことが分かる。